

# 幼児の教育

家庭-保育所-幼稚園

'97年 11月号

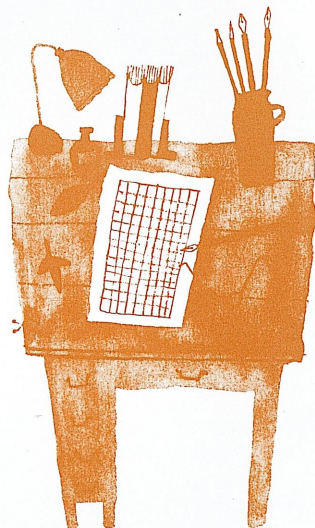


# 倉橋惣三

荒井 洌 著

## 保育へのロマン

最新刊



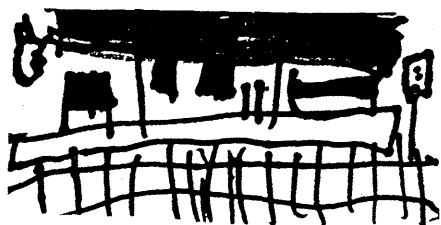
「倉橋は決して古くない!」。日本保育界の巨人・倉橋惣三の思想・理論を現代保育の現場に生かす道を明らかにした注目の本。月刊誌「保育専科」に好評連載されたものを中心に書き下し部分を加え、今日の保育現場で使えるように、分かりやすく的確に倉橋理論を解説します。

A5判 220頁 定価 本体2,000円+税

キンダーブックの  
フレール館

# 幼児の教育

第96卷 第11号



幼 児 の 教 育 目 次

—— 第九十六卷 第十一号 ——

© 1997  
日本幼稚園協会

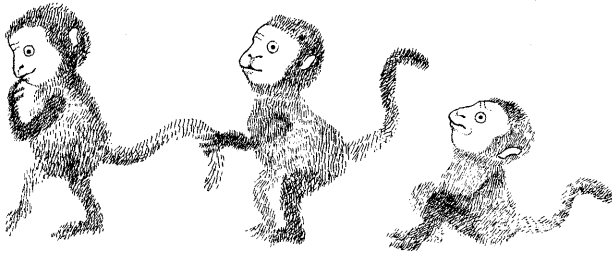
ある日…………… (4)

保育学文献賞を受賞して② どうしたはずみか家族になって…福田 優子… (6)

「児童の世紀」を振り返る―その四―……………本田 和子… (12)

保育者の好ましい語りかけ―保護者との伝えあいの事例より―豊永家壽子… (22)

子どもが大人になるとき……………津守 真… (31)



子ども時代と私(9) 疎開先で……………小宮山洋夫…(36)

ある日の育児日記から(83)……………佐藤 和代…(43)

夢の日々 二人で入園し、三人で卒園(二)……………大多和 檀…(44)

年長組の一学期を終えて思ったこと……………高橋 陽子…(50)

あそびはらっぱものがたりーあきー……………すとうあさえ…(56)

表紙絵／小田原千佳子

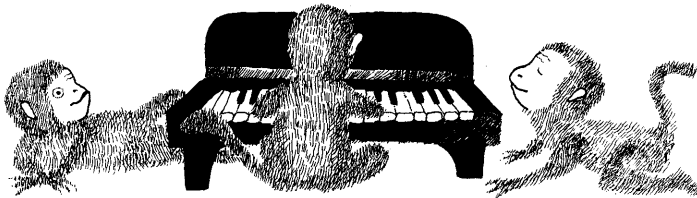
扉題字／津守 真

扉カット／お茶の水女子大学附属幼稚園児

カット／彌永たたえ「うっとりしている人」

編集委員／田代 和美・伊集院理子・上坂元絵里

編集部／仲 明子





ある日

摄影・平野 清



## どうしたはずみか家族になつて

福田 優子

私たち、子どもを愛育養護学校に通わせた(通わせている)親たちがそれぞれの思いを書き綴ったものが、りっぱな本になって、なんとこのたびメダタクモ保育学文献賞を受賞してしまいました

(『親たちは語る』愛育養護学校〔幼児期を考える会〕編、ミネルヴァ書房、一九九六年)。すごい

な! 私たち一同とても晴れがましい気持ちで

す。ありがとうございます。へらへらとよろこんでいたら、幼児の教育の編集の方から受賞にあたって何か書くように言われ、浮かれていたのでひきうけてしまいました。

「親たちは語る」なんてなかなかいかめしい題ですが、障害のある子を育てている家族のよもやま



ばなしです。この本に寄稿しているほとんどすべてのおかあさんと、私は愛育養護学校で一緒にいた。障害のある子を育てていく大変さというのは、人それぞれでしょうが、自分の子どもをなかなか可愛らしいと思えないのが、大変といえは一番大変なことです。つわりを乗り越えお産を乗り越え、さあこれからかわゆいかわゆい赤ちゃんをママが育ててあげまぢゆからね、なんて甘い感傷もつかのまの夢で、気がつくとはかの子とは一風変わった子の世話にあけられているのです。

よその子は公園でみんなと砂遊びをしているのにどうしてうちの子は屋根にのぼるんだらう。どうしてうちの子は呼んでもふりむかないんだらう。どうして電車ばっかり見ているんだらう。どうして激辛スナックしかたべないんだらう。どうしてこんなにスト

ローを切るんだらう。どうしてどうしてどうして……。

自分の子どもがこの先どうなっていくのかわからなくて、心配ばかりしてすごしていた私たちにとって、同じ悩みを持つ仲間がいるというのは何よりも大きな支えでした。

わが子の、言葉にならないきんきん声にうんざりして、予測できない行動にいらだって、あーあ、この子を産まなければ良かったなんてふと



思ってはひどい自己嫌悪におちいつて。こんな気持ちをはひとりぼつちで抱えていたらとても子どもなんて育てられなかったでしょう。私たち母親だって神様じゃないもの。

「母性愛なんてね、十分寝足りている人たちの幻想よ」なーんて、みんなで笑い飛ばしてみると、ちょっぴり元気になれるのです。そうしてなんだかんだ言いながら、わたしたちは運命にずるずるひきずられて、一筋縄ではいかない子どもと暮らし続けているのですよ。それでも、一つ屋根の下で十年以上暮らしていると、生活のこつのようなものが子どもにも親たちにもそなわってきます。「成長」なんて、そんなたいそうなものではないんです。顔をつきあわせているうちにだんだん馴染んできた、というくらいのもんです。

障害のある子どもを十五年以上育てている私の友人たちは、結局子どもというのはなるようにしかならないのよね、と口をそろえています。子

どもというのはその子の勢いにまかせるしかないんだなということが納得できると、親も子どもとなく楽になるようです。けれど、子どもが小さい時はそんなのにんきには構えていられません。この子の障害を少しでも軽くするのが母親の義務だわなんて思ってしまう。たとえ障害のことはすんなり受け入れられたとしても、この子のためには最善をつくさねば、なんて思いつめてしまう。ねばならないことなんて何ひとつないのに。そんなに肩に力をいれてたら家族みんながくたびれてしまうのに。

世間のプレッシャーもすごいですね。子どものやりたいようにやらせていると、親なんだからちゃんと躰ろと言うし、鬼のような顔をして夢中で躰まくっていると、親のくせに子どもが可愛くないのかなんて言われて、どーすりゃいいんだよーって泣きたくなっちゃいますよね。手は出さずに口だけ出すやからの多いのなんの。困った時

にただそっと手を貸してくれる人がどれほどあり  
がたいことか。助けてくれなくなってしまうので  
す。妙にはげましたり尊敬したりせずに、当たり  
前の顔をしてそばにいてくれるだけで、どれほど  
気持ちが悪く落ち着くことか。

あら？ ということは子どももそう思っている  
のかしら。見通しがたたずに混乱している時は説  
教されてもなぐさめられてもうるさいだけですも  
のね。大人は見守ることしかできません。いつか  
きつとひとりで立ち直るのだから。

私はただの母親で教育者じゃないから乱暴に言  
い切ってしまうすけれど、よくも悪くも、その  
子の本質的なものというのは、外からのほたらき  
かけではあまり変えられないように思います。内  
側に潜んでいる力を最大限にひきだすという考え  
方もありますが、潜んでいるものなら、おそかれ  
早かれ自然に表面に出てくるんですよ。私たち  
はみなそういう生き物なんじゃないかしら。

変えられない。ひきだせない。それじゃあ親は  
何するの。何もできないんです。だってなるよう  
にしかならないんですから。運命を自分で切り開  
くことが大好きなむきには歯がゆく見えるでしょ  
うが、なるようになっていくというのはこれで結  
構技術がいるのですぞ。

私の娘の彩子は今十六歳になって、今のところ  
は親がほとほと困るような要求はあまりないの  
で、わりとのんきに生活を送れますが、子どもの  
状況によっては、もう親はへとへとになって子ど  
もが寝ている時だけがくつろげる、なんて人も多  
いでしょう。中には寝ない子もいてホントに困  
る。親は二十四時間コンビニ体制で緊張していな  
くてはならず、息つく暇もあればこそです。そう  
いう中で一日をなんとか終わらせるというのはと  
てもエネルギーのいることです。

愛育養護学校というのはそんな私たちの日常を

さりげなく応援してくれる場所です。そして何よりも子どもの生活の場です。この国では矯正を前提にした訓練や学習の場はありがたいことたくさんあるのですが、子どもがその子らしく生活できる場はととても少ないのです。将来のよりよい生活のために奮闘努力をかさねて、将来がこないうちにくたびれちゃったらどうするの。子どももたぶん大人も、自分で意識している以上に精一杯に生きていような気がします。だからもっと目標を高く持てなんて言われたらみんなこわれちゃうよ。

愛育で育った子どもが、すっきりとした大人になるかどうかは請け合えませんが、ただこの子どもたちは自分をこわさない方法をよく知っていて、自分が生きやすい環境を整えるためには実に熱心に努力をします。はじめはあきれていた母親たちも、子どもたちが切実な思いで、与えられた「生」を守っていることに気がつく、なん

だかとおもあっぱれだなあなんて思えてくるのです。

彩子は目

をさますと

おたからを

かかえて居

間の所定の

位置にじんどり、こだわりの食事をして、好きな

テレビ番組だけを見て、出かけられる場所にだけ

出かけ、好きな人とだけまじわり、程々で勝手に

切り上げ、スーパードでは赤い蓋のふりかけと黄色

の蓋の換気扇クリーナーを買い、ハンサムな青年

に出会うとじつと見つめ、救急車のサイレンに絶

叫し、赤ちゃんを喜び、大相撲を楽しみ、午後五

時になると「おかあさんといっしょ」にチャンネ



ルをあわせ、冷蔵庫をあけてこだわりの食事の指示をし、またまたおたからを全部抱えて寝室にひきあげ、ムーミンのビデオを見て、私に主題歌を歌わせ、なぜかこのころは新メニューとしてブルース・スプリングステイーンをボリユームイッパイにして聞き惚れ、私が音をしぼるとバイバイをしてあっちに行けといい、つまらなくなるとわあわあ騒いで誰かを呼び、大人たちが寝るといつのまにか眠りにつきます。

えーっと、どこが努力でどこが切実なんだといわれると困るのですが、彩子にとっては、こうしてこつこつとつくりあげている毎日の生活そのものが生きる目的であり、成果でもあるのです。

『親たちは語る』に寄稿した私たちは、あいかわらず親子して世の中の流れからはかけはなれたところであっぶあぶともがいておりますが、まあこれでいいんじゃないかって思えるところから、

家族って始まっていくのだと思います。

お互いにとんちんかんだから親子して空回りばかり。押したり引いたり、泣いたり泣かせたり、怒ったり笑ったりしながらなんとか一日をやりすごしていく。それは幸せとか不幸とかの言葉ではなくれない、まして哲学でも教養でも社会貢獻でもない、もっと単純でささやかな生活の営みです。

どうしたはずみか家族になって、はずみのついたまま一緒に暮らし、この先どうなるのかちっともわかりません。ホップな生活とはこのことかしら。それでも私たち、夫も私もそして彩子もこんな毎日が結構気に入ってるみたいなんですよね。

(愛育養護学校家庭指導グループ)

# 「児童の世紀」を振り返る

## — その四 —

本田 和子



パラドックスとしての「童心主義」

— 遅れてきた湖畔詩人たち（つづき） —

わが国の子どもを巡る今世紀は、わが国流の科学的児童研究の幕開けの時でもありつつも、同時に、前稿引用の石川啄木に代表されるわが国流のロマン派詩人あるいは、湖畔詩人たちがひたすらに童心に憧憬し童

心賛歌を謳い上げること幕が開かれている。ワーズワースやブレイクら本家イギリスの詩人たちの歌声が、あたかも一世遅れでわが国に届いたとでも言うかのように……。このことをめぐる前回の補いとして、先ず、これらの海の彼方の先達たちの童心賛歌を振り返ることから、本稿を始めるところとしよう。

「小児は成人の父なりとは湖畔の詩人が歌へるところ

となりき」と、啄木の一文に登場した湖畔詩人が、ワーズワースを指すものであることは言を待たない。ワーズワースが、『抒情歌謡集』から『序曲』に至る多くの作品において、繰り返し「子ども」を、より正確には「子ども時代、しかも自身の幼年時代」を主題化し、その喪失に思いを潜めたことはよく知られている。

子ども時代の「主客未分の合一」こそを人間の「英知」と見なす子供観・人間観は、彼個人の幼児体験に帰されるにまして、一八世紀末の多感な若者の成長を代表するものと見なすべきだとは、ピーター・カヴニーの優美的確な指摘であった。たとえば、ニュートン力学とロックの「人間悟性論」に決定付けられた一八世紀的合理主義と唯物論的決定論は、若きワーズワースを先ず魅了したが、やがて大きな失望に陥らせていく。また、当時の若者の人道的政治心情によって激しく共感され、それでいて、続く恐怖政治のゆえに

政治への幻滅の源泉となったのが、フランス革命であったことはよく知られている。彼の場合も例外ではなく、ワーズワースの精神と心情の軌跡は、一八世紀生まれの生真面目な若者たちが、知的成長の過程で味わったであろう共通の経験以上でも以下でもない。続く失意の時代を経て、その後を訪れたのが「自然」と「子ども時代」への収斂であったとは、「理性」を追い求め過ぎた帰結としての、「本能」と「感性」への回帰と捕らえることが可能だろう。

彼の辿ったこの軌跡を、時代的心性の動向と見るなら、それは、人間工学的「観念連合理論」とその所産たる「決定論」から人間を解放し、生きる自由を回復すべく志向されたものとも言い得る。すなわち、連合的操作の外にある「自然」と、連合以前の本能を生きる「子ども」へと、思いを潜めることが新しい希望として迫り出してきたのである。

さて、視線をもとに戻して、わが国の遅れて来た湖

畔詩人たちに注目しよう。先に引いたように、石川啄木が前例として掲げたのが、一九世紀詩人たちの「子ども礼讃」の言辞だったのだが、それらが、彼の魂を激しく揺さぶり、当時の科学的児童研究やそれらを踏まえた児童教育にあえて反発して、熱烈にして過激な「子ども賛歌」を謳い上げさせたのであらうと推測することは容易である。先の文中には、「知識は過重されたること既に久焉（ひさし）」、「知る知らざるに閑せず、自ら為すある人は乃ち生甲斐ある人なり」とばかり、「真と美と生命」を忘れた知識偏重の啓蒙主義に對する苛立ちが示されている。また、林中の猿との問答の形で、「汝等が称して文明の機械というもの、何れか汝等が怠慢を助長する悪魔の手たらざる」、あるいは、「汝等は随所に憎むべき叛逆を企てて自然を殺さんとす。自然に叛逆するは取りも直さず之れ真と美とに對して奸悪なる殺戮をなすなり」など、激越な言辭で文明批判が述べられていた。



「子ども賛歌」と「自然回帰」という砦に勝利の旗を翻すべく、「通俗的啓蒙主義」と「文明開化思想」に敢然と宣戦布告がつけつけられる。啄木らの言説をこう解すると、それは、まさしく、一世紀前のワーズワースらが描いて見せた精神の軌跡と重なり合う。彼らは、滔々と世を席卷する近代合理主義に對して、警鐘を打ち鳴らす立場を共有したのではないか。とすれば、一八世紀末イギリスの若者たちと同じ土壌の上に、わが国今世紀の多感な若者たちも置かれて、失意や憤りに苛まれていたのではなかつたらうか。

啄木らの「子ども賛歌」、あるいは、小川未明らの「童心憧憬」も含めて、それらはいずれも、明治新体制への失望から生じたと言われている。確かに、啄木が幸徳秋水の大逆事件に強いシンパシーを抱き、未明



がアナキストを標榜した一時期があったように、彼らの「子ども回帰」が、体制への失望や憤りと無縁であったとは言い難い。しかし、彼らの体制批判を政治体制へのそれとしてのみ把握することは、即断の誇りを免れ得ないのではないか。それは、明治維新以降、ひたすらに啓蒙の繰り返された西欧型合理主義への疑念、その知的土壌を疑うこともなく展開される学校教育への抵抗、そして、さらに、楽天的・向日的に前進を開始した児童研究指導者たちへの苛立ちも含めて、広い意味での知的・文化的体制への異議申し立てと解すべきであろう。

ところで、湖畔詩人たちが「子ども」に見いだした価値は、決定論に異議申し立てし、人間を静的な連合の呪縛から解き放つために機能させられている。それに比して、啄木の時代に、世界は進化論によって動的なものへと転換していたし、「子ども」には、既に重要な価値が付与されていた。したがって、彼らのなし

たことは、近代主義が奏でた「体制的子ども賛歌」に対しての異議申し立てということになる。仮に、この「反体制的子ども賛歌者」を「童心主義者」と呼ぶとして、彼らは、「子ども」は進化によって価値あるものへと成長するにまして、「童心の所有者」という存在そのもののゆえに価値があり、「童心」は既にして完成体であるとその無謬ぶりを讃えたのであった。

彼らの提唱した「子ども賛歌」や「童心主義」は、しばしば、次のように批判されている。すなわち、主観的心情に流れて科学性を欠き、客観的対象としての「子ども」への目配りがなく、と……。しかし、このことは彼らの主張の特色、すなわち、依って立つ基盤そのものであって、この特色抜きには存在意義そのものが薄弱となる。なぜなら、これらの「子ども賛歌」は、進化論的科學主義に支えられて王道を行く「体制的子ども賛歌」に抗し、それらを潔癖に排除した地平に姿を現したものである。

## 市場を行く「童心主義」

——三越の子ども商戦と

「大供会（おんどもかい）の出現——

一九〇九（明治四二）年四月、三越百貨店は、一ヶ月にわたる長期間の「児童博覧会」を開催している。三越は、当時、欧米流のデパートメント・ストアーを旨指して、文化人・知識人らをも巻き込み、意欲的な多角経営を試み始めていた。

この「児童博覧会」には、顧問として巖谷小波が参画して大いにその見識を披露したと言われている。小波は、周知のように、少年小説『こがね丸』の成功以来、文壇の「子ども屋」として、巷間にその名が高かった。そんな彼を招聘し、百貨店の一大イベントの成否を委ねる。この動きの背後から透けて見えてくるのは、当時の社会が、より正確には市場社会がとやうべきかも知れないが、それらが「子ども」と結んだあ

る種の密約に他ならない。三越百貨店が、「博覧会」と

「子ども」という二つの主題を浮上させたとは、山口昌男の興味深い指摘である。言うまでもなく、このことは、わ

が国の今世紀が、都市型消費社会へと転換して行く予告でもあった。

三越百貨店のイベントとして、「児童博覧会」を実施することは、同じく山口の言によれば、子どもを生活文化への関心の高まりに注目した「流行会」メンバーの提案によるとされている。「流行会」とは、三越の創始者日比翁助の肝入りで集められた学者・文化人の集いであった。日比翁助の抱負は、百貨店に、単なる商いのための大型店舗であることを越えて、カルチュアセンター的機能を担わせることにあると言われるが、確かに、「流行会」に参集したのは、人類学



の坪井正五郎、民俗学の柳田国男、歌人の吉井勇、佐々木信綱、あるいは画家の黒田清輝、浜田青陵、杉浦非水など、世に知られた錚々たるメンバーであった。そして、メンバーの一人巖谷小波に、大任が委ねられて、先の「児童博覧会」の実現となり、大好評裏に終わったこの催しは、以後、毎年開催されて三越の名物イベントとなった。

「大供会（おどもかい＝子どものような大人の集まり）」の発足は、「子ども」の浮上を象徴する出来事である。従来の店舗とは異なる欧米型の百貨店の登場によって、都市住民の間には新しく「趣味」という概念が発生した。先の「流行会」のメンバーもこれら趣味人の代表とも言い得るのだが、彼らは宣伝用情報誌『時好』の編集に参画しつつ、おりに触れて、展覧会や講演会を催して趣味の普及に努めるのだが、そのなかに、「子ども」というテーマも位置付けられ、「玩具」や「児童用品」への趣向が形を現し始めてくる。

関心のあるメンバーによって、「児童用品研究会」なるものが結成され、しばしば、「子ども」をテーマとした会合なども催されるようになる。

言うまでもなく、新興百貨店のバックアップする研究会であってみれば、当然、それは、営利事業と結び付いていたのであり、その背後には、パリのオ・プラタンやビュエット・ショモン等の百貨店が、人形や玩具等の子ども向け商品に力を入れているという事情も存在していた。時代を見るに敏な日比翁助が、商行為の前面に「子ども」を出して見ようと思いついたのは、こうした世界的市場動向との連動であろう。

ただし、多くの文化人・趣味人たちが、こうした商業主義的な動きに唯々として、というよりむしろ欣然と、協賛の意を表明して参画し、子ども関連のことに、時間を労力を惜しまなかったところに、「児童の世紀」の真骨頂がある。仮にその意図が新市場の開拓であったとしても、選ばれたテーマが時宜を得ていた

ことは確かだし、また、人々が、自分の「童心」を顕示したがるような心性が醸成されていたことは事実だろう。彼らは、自分がいかに子どもっぽいか、そして、どこまで子どもに帰れるか誇示し合って、それを楽しんだのであった。

この間の事情に関しては、私どもに親しい倉橋惣三も、当時を回想して次のような一文を残している。すなわち、時代の空気のなかに、「子ども性」を楽しむ心性が漂っていた、と……。

当時（明治の末）の東京には、子供向きの娯楽の機会がいろいろあった。というよりも、おとなの娯楽が子供にも適していたといつていいかも知れない。おとなと子供の共通の娯楽ということでは、現代のリクリエーション論として一つの問題になるが、特におとなだけの慰安は別として、社会的にそれが共通でもあんまり差支えない程度

に、おとなの娯楽に稚氣が多かったのである。あるいは、当時の社会的な娯楽の客寄せの主な対象は子供で、おとなは子供のつきそい、同伴者、さ

らに往々、子供をだしに使って楽しむ子供のような大供であったと見れば、むずかしい問題もあるまい、そのつきそいでも同伴者でもない、また、必ずしも、子供をだしに使用してぶらつく与太郎でもないが、そうした機会を拾っては、街の子供と楽しみを共にしに出かける彼であった。（『子供讃歌』より）

こうした「子供のような大供」の集うたのが、「大供会」という趣味と遊びの会である。三越の資本という十分な背景を持って、坪井正五郎のように新案玩具



の考案に手を染めるものもあり、また、講演や玩具収集、あるいは懸賞玩具の審査など、各地を旅して行く先々で「子どもぶり」を發揮した。メンバーの一人の松居松葉は、旅の模様を左記の一文で面白おかしく、次のように伝えている。

いずれも児童用品研究員でいずれも児童狂というよりは、自分自身が児童（子ども）らしい連中、旅行の目的に至っては更に児童らしい、大阪府で開かれた児童博覧会見物のためであるのだ。

(『三越』第一巻第二号より)

試みの一環として、一九一一(明治四四)年、大阪三越で開催された講演会では、巖谷小波が『児童本位』という演題で、また、坪井正五郎は『諸人種の子供』と題された講演で、それぞれ、満場の拍手を受けたという。小波はこの講演旅行について次のような短

文を発表していた。

さて、こう見來った処は、いずれ劣らぬ大坊ちゃん、これが京、大阪まで乗り出して、仲よく遊んで歸った処は、正に我が児童用品研究会の、万歳と連唱するに足ると無上に子供がる拙者の如きは、食過ぎもせず、寝冷えもせず、迷子にも成らず、ダもこねず、ほんとにおとなしかったぜと、自分のことは棚に上げて記るす(『三越』第一巻第二号より)

私どもは、しばしば、倉橋の子ども観や、幼児教育における児童中心主義を、無類の「子ども好き」という彼の個人的特性と、海外に興隆した新教育思想との関連で説明しようとしてきた。確かに、自らの歩んだ道を、「子ども道楽」の遍歴と位置付ける彼自身の言からみても、また、当時、アメリカ合衆国などに勃興

した進歩主義的な教育運動の影響という点からも、そうした把握が妥当性を持つことは否むべきもない。ただ、言うまでもない事ながら、それは、時代の空気でもあった。何しろ、「かくあるべし」と言う儒教的モラルや、「追いつくべし」と目標化された欧米型行動規範から逃れ、「子ども好き」や「稚氣」をのびやかに解放しつつ天下の王道を歩くことが可能となったのだから。

### 「童心主義」の二つの相

ところで、私どもは、次のようなことに気付かされる。先に引いた石川啄木や小川未明によって発見された「童心」が、時の流れに抗して異議申し立てする心性の表現であったのに比して、「大供会」の人々の取り出した「童心」は、何と大らかに陽光の当たる場所におかれていることか。しかも、「童心」が「回帰すべき故郷」と位置付けられているところは同じなが

ら、前者は、そこに「人間の理想」と「失われつつある価値」を見てそれに渴仰し、さながら伝道者の熱意でその喧伝に努める。他方、後者は、

玩具を集めたり改良したり、

あるいは、博覧会や展示会などイベントを開催するなどの仕方、自他に共有される「子どもらしさ」を楽しませるための「現実的営為」に意を注いだ。

ここに、私どもが見るのは、今世紀前半におけるわが国の子ども関連事象に付された特有の徴である。よりはっきりと、子どもに注がれるまなざしとその表現としての子どもを巡る動きとの、両者に付されたアンビバレントな二つの徴と言うことも可能だろうか。

すなわち、反体制教育・反功利主義・反合理主義など、とりあえずは子どもにかかわる新動向に「ノン」の意志を突き付け、その表現として標榜される



「童心主義」と、市場社会の完成や学校教育制度の充実という体制的動きに抵抗のエネルギーを割かず、時にその流れに乗り、時に自身の趣味に偏して距離を置きつつ、子どもとの共存を楽しむ「童心主義」の二つ……。後者は、先にのべたように、商業主義と結び付いて市場社会の進展に手を貸し、あるいは、学校教育のなかに場所を求めて制度的結実を志向した。前者は、後のプロレタリア運動への道を用意し、後者は、モダニズム運動や大正自由教育運動と連携したと言うことも可能かも知れない。

ところで、先に触れた山口昌男は、児童博覧会や「大供会」などの一連の動きを、他の多くの民間学者たちのネットワークや、彼らが演じて見せた興味深い諸運動と並べて、『敗者の精神史』という論稿のなかに位置させている。敗者、すなわち、明治藩閥政府の階層秩序の外に出た人々の、活躍の一つと捕らえられているのである。とすれば、「子ども」関連事象に熱

中した人々は、いずれも、特に反体制を言挙げしようとして、あるいは商業資本や体制教育と手を結んで流れを泳ぎ抜いたかに見えたとしても、所詮は、公的ヒエラルヒーから外れて、権威や権力とは無縁の周边的位置に佇んでいたということになろう。

しかし、私どもは、このことで失望し、その位置付けを自嘲的に捕らえてはなるまい。私どもは、子ども関連の専門家として、「子ども」を中心化することに慣れ過ぎていた。したがって、「児童の世紀」の光芒も、結局は局部を照らすささやかな灯火に過ぎないと告げられるとき、いささかの挫折感に襲われもするが、周辺あるいは敗者の視点抜きには、真の文化形成など、到底、覚束無いという事実を至すべきであらう。

(聖学院大学)

# 保育者の好ましい語りかけ

—— 保護者との伝えあいの事例より ——

豊永家壽子

保育者養成において重要視されることの一つに、子どもを見る力を育てるということがある。その力は、学生が乳幼児と触れあう中で、子どもが持つ生命力やその表われに感動することによって、少しずつ養われていくものであると考えている。

しかし、最近の学生は子どもとの触れあいもほとんどなく、まして、子どもと共感しあう機会に恵まれて

いない。したがって、専門的な知識・技術について具体的な例をあげて説明しても、学生は大切なこととして受けとめられないようである。

一方、私たちは保育現場の人々や園の保護者とかかわる中で、保育者の心ない発言に対する不満や、保育者から相当なショックを受ける保護者の存在が気にかかる。その反面、保育者が日々の保育の中での子ども



の姿を保護者に伝え、両者の感動体験から信頼関係が深まっていく事例も多く耳にする。いずれにしても、保育者が一人一人の子どもをよく見、真剣にかかわっているか否かが問われているといえる。

そこで、感性とその表現の豊かな保育者養成のためには、どのような試みをすればよいのかを求めて、保護者の心をつつ保育者への語りかけをできるだけ具体的な場面の中でとらえ、学生指導に役立てたいと考えた。<sup>注1</sup>

## 一、はじめに

乳幼児を保育所や幼稚園に入園させている保護者は保育者を信頼し、園生活を通して子どもが成長していくことを期待している。中には子育てに無関心で園任せの人もいるし、園や保育者に不満を持つ人もいる。しかし、大部分の保護者は、保育者から知らされるわが子の変化や育ちに喜びを感じ、自分の子育てについ

ての反省の機会ともしている。

保護者の心を動かす保育者の語りかけが好ましいものであれば、子育てへの希望や意欲を抱くことができ。一方、保育者の不用意なひとことが保護者の心を傷つけ、子どもを巻きこんでしまうこともある。

今日、核家族化が進み、子育ての具体的、直接的な情報や実際的な援助が乏しい保護者を、精神的に支えていく役割の一端を保育者が担っているといえる。両者が連携を図り、園と家庭の生活がスムーズに流れていく中で、個々の子どもが健やかな発達を遂げるように援助すべきであると考える。



そこで本研究は、保護者が保育者からの語りかけをどのように受けとめ、また、何を期待しているのか、その率直な声を集約して、広く保育者養成に役立てることを目的とした。

## 二、調査方法

調査方法は、聴き取り調査およびアンケートによる調査（園の職員を通さず直接回収）で、保育者の語りかけをプラス思考で受けとめた事例を中心に、園および保育者への具体的要望もあわせ集約した。

調査対象は、東京都・神奈川県・千葉県・福岡県・大分県の保育所・幼稚園児約七十名の保護者と対象に行ない、八十余の事例が寄せられた。

調査時期は、一九九六年十月より十二月である。

調査内容を、子ども・保育者・保護者の三つに分類して考察したが、その内容は相互に関連している。

## 三、結果と考察

本研究の目的にしたがい、主な事例を取りあげ、会話を「」、保護者の感想等を（）、考察をへ〜と示す。

### (一) 子ども自身の発達・友達との育ちあい

事例1 オムツ取り（一歳）

「きょう初めてオマルにおしっこが出ました。そのおしっこを持って帰りたいくらい嬉しかったです」

（毎日きまった時刻にオマルに座らせて、オムツ取りに協力して下さった）

〈保育者の感じ方に保護者が感動し信頼感を増す〉

事例2 頭にこぶ（二歳）

「手当てをしたので大丈夫と思いますが、お家でも様子を見て下さい。すみませんでした」

（その夜「〇ちゃんいかがでしょうか。大丈夫ですか」と電話があった）

〈保育者の責任感に、保護者も保育者を気遣い、かえって信頼関係が深まる〉

### 事例3 もう△歳・まだ△歳（三歳）

担任は「本の読み聞かせの時も一人だけ座っていないで、ふらふら歩き回って落ち着きがない」。別の保育者は「もう△歳になったから、あれもこれもしてほしい、できてほしい。他の子と同じように……とばかり考えてはダメですよ。まだ△歳だからと考えることも大切です」。

〈子どもの現象をもう△歳とみるか、まだ△歳とみるかによって、保育者の子どもへの接し方が変化する〉

### 事例4 面接の時（五歳）

保育者A「身支度をしたり並んだりするのが、いつ

もとても遅いんですよ。あのまま小学校に入ったら、体操服を着替えてる間に、体育の授業終わるんじゃないかと思うくらい遅いんです」。保育者B「何かしようとする途中でお友達の所へ寄って、おもしろいこと見つけるとそっちの方に夢中になって、頭の中はそのことでもいいで、今何をしなければならなかったことなんか、全然考えてないんですよ」。その子どもの小学校の担任「頭の中で色々つぶくらせるのって、すばらしいじゃないですか。その空想の中をちょっとのぞかせてほしいですね。今のところ全く問題ありませんよ」。

（毎日「早く、早く」とビシビシ叱ればいいのかどうかと不安になったが、小学生になってからほっとした）

〈子どもの言動に対して、子どもの側に立って気持ちを汲みとろうとするか、大人の側から一方的に見るかによって、子ども理解が異なってくる〉

事例5 障害児との触れあい（五歳）

園で、障害のある子どもの世話を、周りの子どもたちが自然な姿でやっている機会に出会い、何度となくとても嬉しく思った。同じ仲間として生活する、そういう教育を取り入れて下さった保育所に感謝している。

〈個人差の著しい乳幼児期は、発達に応じた援助とともに、子ども同士が育ちあう環境が必要である〉

(二) 保育者の人間性・専門性

事例1 オムツのたたみ方（二か月）

保育園と違うオムツのたたみ方を変えようとする保護者に、「この折り方、初めてだから勉強になります。教えて下さい。」

〈保護者の気持を受けとめ、保護者からも学ぼうとする姿勢がみられる〉

事例2 うんちの始末（二歳）

まだ一人では上手にできない。帰宅後脱いだパンツを見ると、うんちがついていた。「どうしたの」「自分で拭いた」「どうして先生に『拭いて』って言わなかったの」「あのね、先生に『拭いて』って言ったの。そしたら、『もう!!』って言ったから、自分で拭いた」。

〈子どもなりに保育者に気をつかっているのだなあと思った〉

〈保育者の子どもの発達への理解不足と無神経な言葉は、子どもの心を傷つけ、信頼感が薄れる〉

事例3 どろんこ遊び（三歳）

病気がちで外遊びの経験が少なく、素足で地面に立つことさえできなかった子どもが、半年後にどろんこ遊びができるようになった。その様子を写真に撮り、贈って下さった。

〈友達のとろんこ遊びに興味を示した時を見逃さず  
に、共に遊びながら継続した援助を行なうことで子ど  
もが伸び、保護者との共感が得られる〉

事例4 ハーモニカ(四歳)

演奏会の前に保護者が、「○ちゃんのハーモニカ、特  
別なものにしてあげるね」と、セロテープで巻いた  
ハーモニカを子どもに渡した。帰宅して「お母さん、  
どうして僕だけ特別なの」と聞く。

(何も答えられず、園を変える決心をした)

〈保育者は会の成功を目ざし、評価を気にするあまり  
子どもの気持を汲みとらず、プライドを傷つける〉

事例5 子どもが見えない(四歳)

「園ではどんなでしょうか」「これといって問題はあ  
りませんよ」「どんな遊びをしていますか」「きょうは  
折紙で遊んでいました」

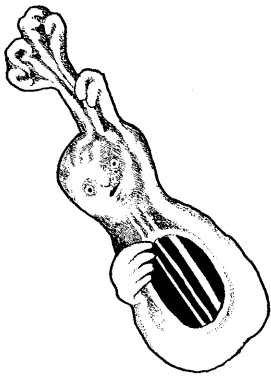
(尋ねなければ何も言わない)

〈園での様子を知りたい保護者の願いに応えることに  
よって保護者の安心感や信頼感が増す〉

事例6 車の絵(四歳)

「三十台ぐらい、園庭いっぱい車の絵を描きまし  
た。どれも型が違って同じものが一台もないんです  
よ」

(車の一台一台に目を向けて、喜んで下さった。親に  
とってこんな嬉しいことはない)



〈保護者に保育者の子どもへの愛情が伝わり、感謝の気持ちが増く〉

### 事例7 かけっこ(五歳)

かけっこの練習でいつも一番になれない。運動会当日、保育者は子どもの肩をポンとたたき、「きょうは本気で走ってごらん」。子どもは用意・ドンで一番に飛び出した。結果は二番だったが、本人は一生懸命走ったことに満足した。

〈運動会という大きな行事の中で、一人の子どもの心の動きに気づいた保育者の温かいかわりで、子どもが励まされ、これを機会に信頼関係も深まる〉

### (三) 保護者の子育て支援・家庭との連携

#### 事例1 どうぞお仕事に(六か月)

登園してすぐうんちを始めた。終わりを待って始末してと思っていると、「お母さん、後は私がしますか

ら、どうぞお仕事に行ってください」「でもうんちの始末が……」「朝からうんちなんで、とても気持ちいいじゃないですか。元気なうんち見るの、私大好きです。だから、どうぞ気にしないで早くいらして!」。(恐縮しつつも、若い保育者の声をさわやかに、嬉しく感じた)

〈遅刻させまいとの温かい対応、ここに日ごろの子どもへの愛情も感じられ、両者のよい関係がみられる〉

#### 事例2 連絡帳・降園時のひとこと

◇「お母さん、きょう三步、歩きましたよ」と声をはずませて話して下さった。

(一つ一つの成長を自分のことのように喜んで下さる保育者のことが大好きな子どもになった)

〈子どもの成長を喜びあうことによって、保護者は子育てへの希望を抱く〉

◇「きょう〇ちゃんから、お父さんとお母さんの……

の話を書きました。とっても楽しかったです。○ちゃんありがとう。

（この保育者は、日ごろも子どもから喜びをもらって嬉しいという表現が多い。また、さりげなく自分の子育て経験―失敗例も―を語って下さる）

〈喜びの共有、子育てを担いあっていると実感する〉  
◇「お母さんお帰りなさい。お疲れさまでした。○ちゃん元気でよく遊びましたよ。」

（一泊の出張帰りでお迎えの時、いたわりの言葉をかけて頂いた）

〈留守中の心配も疲れもとれ、思いを受けとめてくれる優しい言葉に、保育者との距離感の変化を感じる〉

#### 四、要約

この調査から、保護者が求めているものは、極めて具体的な園生活での情報であることが明確になった。

保育者が子どもの発達のみちすじをおさえ、園生活

にみる子どもの育ちを伝えたり、自己の体験を交えて語る中で保護者が励まされ、両者の信頼関係が得られる。そこに子育てを共有する一体感も生まれ、保護者の心が開かれていく。このことが、保育者と子どもとの良好な関係を築くことにもなる。

したがって、保育者養成の中で、専門的な知識・技術はもとより、保育の心をいかにして育てていくのが問われる。

まず、保育の原点に戻り、子ども・保育者・保護者ももっと素朴に感じあい、お互いの成長が期待されるような人間関係を築いていくことが大切である。

#### 五、おわりに

本調査を総括し、今後の方策を次のように考える。

保護者が知り得ないその日の子どものつぶやきや行動、友達との触れあいなどを、連絡帳を通して、あるいは送迎時のさりげないひとことで伝える。言葉に表

情と心をこめて、子どもの具体的な姿や場面を伝えることで、保護者は一日の疲れを忘れ、家庭と仕事の両立への意欲をかきたてられる。

このように、子育ての共有・支援は、日常生活の中のやさやかな言葉のやりとりや感じあいによって達成されていくことに留意して、学生指導にあたりたい。

しかし、保育者を養成する立場にある私たちは、学生の生活とどうかかわり、そこに何が見えているのだろうか。どのような温かい励ましや称賛を行ない、あるいは嘆き悲しみを共感しているだろうか。日常的な学生指導が省みられるところである。

今後の課題として、まず、私たちは学生一人一人にかかわりを持つ工夫をし、様々な場面・機会をとらえて、学生が主体的に課題を見つけ、判断する問題解決能力を培うよう個別指導を行なっていく。

次に、学生自身の人間性と保育者としての専門性を高めるためには、特に異世代の人々との交流の必要性

を説き、学生自らもそれが実感できるよう、実習研究等の授業の中で、このたびの事例を取りあげ、言葉の持つ意味を意識的にとらえることを習慣づけていきたい。

(別府大学短期大学部)

注1 本稿は、日本保育学会第五十回大会において共同研究<sup>注2</sup>として報告したことを基に、掲載できなかった事例等を書き加えた。

注2 共同研究者

三池裕子(久留米信愛女学院短期大学)

原田康子(和泉短期大学)

坂口りつ子(西南学院大学)





# 子どもが大人になるとき

津守 真

私はこの頃大人とかわることが多い。子どもを保育するときと大人とかわるときとはどこが違う、どこが同じなのかわからずしばしば考える。

子どもが大人になるとき、何が変化するかということ、子どもを肉体ととらえて、身体面、精神面の変化、異性に対する態度の変化などについて研究することができるときの。そのような一般的な知識は参考になるが、私はここでは子ども及び大人とかわる立場から考えることにしたい。



子どもとかかわるときと大人とかかわるときと

1 子どもの仕事をしてきた者が、大人の仕事をできるようになって気が付いたこと

子どもの保育の場合には、状況が瞬間瞬間に目まぐるしく変化するから、かかわる者はとても忙しい。大人の場合には、生活も時間もゆっくりしており、かかわる者の動きもゆっくりしている。これは相違点である。しかし事が起きるときは瞬間であり、かかわる者の瞬時の判断と行動が重要である点は共通である。

子どもの保育の場合には、関係の中で保育者がどのように応答するかということだが、子どもの世界の大きな部分を占めていた。大人の場合もそれが基本であることは同じだが、環境（住まい、仕事など）をつくるのが更に大きな課題となる。どんな人間関係を良くしても、住む場所を変えないと問題が解決しないことがしばしばある。集団的な施設に住むのか、小さなホームに住むのか、自分の家に住むのかはその人にとって重大である。地域の中の活動の場をつくるのか、同質の人が集まる隔離された場所で仕事をするのかによって、その人の生活意識は変化する。

2 親にとって、子どもが大人になるとき

子どもが中高校生になると、自分とは異質の友達に魅かれ、交わり、家にも呼んで来る。本人もその中でこれまでと違う価値観をもつようになる。親は努力してこれまでは違う価値観を受け入れなければならなくなる。そして子どもは自らの価値観を



もって親から離れ大人になってゆく。

とくに現代は異質に対して寛容になり、多様なものと共存することを求められる時代である。異質なものを排除して従来型の価値観を守ろうとすると不幸な者をつくりだすことになるだろう。異質なものと一緒に生活するには、個人の側の努力を要する。また、異質な者が一緒に共存する社会の場を必要とする。実際にそれがなんと難しいことか。長寿社会ではその重要性が一層大きくなるだろう。

### 3 子ども自身が大人になるときの体験

体験は人によって異なり、本人でなければ本当にはわからない。

大人は皆この過程を通っているから、自分自身の体験を顧みるとある程度わかることがある。しかし、ゆっくりと考えないと自分自身の体験でも意識の上に浮かび上がらない。普段は忘却の彼方にある子どもと大人の境目を思い出すことは他人を理解するのに思いのほか役立つものである。具体的な事柄は違っても、底辺には共通の体験があって、互いに理解できるように人はつくられているのだろう。

### 大人になりきれないとき

1 相手が大人になっているのに、それを認めないとき

ことに、障害をもつ人の場合、「永遠の子ども」と言う風に見て障碍の大人と接す



ることがある。障碍をもつ人は、純真で素直であることは確かである。しかし、ことばがきけなくても、歩けなくても、子どもではなくて大人である。ことばを話さなくとも、人間関係の本質を理解していることをいろいろの場面で見られる。「永遠の子ども」という認識は幻想ではないか。それは必要以上に保護的な態度をつくりだす。障碍をもつ人は身体の水準で人間と世界の本質を洞察して、一生懸命に生きていく。

## 2 未成熟な大人

エリクソンが言うように、成長の各段階を十分に生きることができなかった場合、その部分が未成熟のまま大人になる。だれもすべての面で十分に成熟している人はいない。だれでもある部分で未成熟さをかかえている。それは大人になってから補ってゆくことである。そこに壮年期、老年期の成長がある。

## 3 大人になるときに、子どもの部分をすべて失うのではない

早く大人になって子どもの原始性や身体性を脱却するのがよいという考え方があつた。それは子どもを一段と低い存在とする見方である。自然への感受性、身体による洞察は背後に押しやられることが多いのが現代生活である。しかし、子どもの原始性、身体性を失わずに保つことは人間らしさを保つのに欠くことができない。これは現代の教育の課題である。



### 子ども時代の記憶は人を元気づける

私は子どものときと、大人になってからとを因果関係で結ぶことはしないことにしている。両者の間にはあまりにも多くの糸が織り合わされている。

しかし、はっきり言えることは、子ども時代の楽しい記憶は、老年になっても心に留まるといふことである。幸せな子ども時代の記憶がどんなに人間が生きる励ましになることか。エリックソンが人間の生涯の成長を考えるのに、晩年しばしば題材として引用しているベルクマンの映画「野いちごの道」の最後の場面で、老年の主人公のボルクは言う。「私は気が落ち着かず寂しくなると、気を鎮めるために子どもの頃のことを思い出した。今宵もそうだった」と。夜の床の中で、子どものときの楽しかったことを考えると、人は明日を生きる元気を与えられる。幼い子どもを保育するものはだれでも、そのような記憶を人の心に残すことができることを確信してよい。

私がこの文章を書こうとした動機は、障害をもつ子どもがおとなになることのことであった。考えてみると、それは障害の有無とは関係がない。どの子どもにも、だれにでも共通である。保育ということばも、幼児と大人との間に閉じ込めるのではなく、大人同士の関係にまでひろげてよいのではないかと私は考えている。

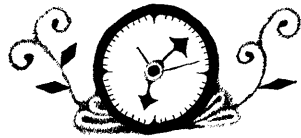
## 疎開先で

小宮山洋夫

社会に出てからぼくは、特定の組織やグループに属することを避けて来た。以前からこの志向性の形成は、子ども時代、とくに疎開先での学校生活と多少とも関わりがあると思っていた。


ぼくは昭和十年、東京の馬込で生まれた。昭和十六年、大阪で小学校に入学、この年に日本は、

太平洋戦争に突入している。次いで関門海峡を渡り、九州福岡で二年生にすすんだ。福岡の小学校については、近所の仲間三人で、学校に行かず、通学路の途中にかかる橋の下で、弁当を食べ、遊んで帰っていたところ、一週間ほどで発覚して、怒られたことが、懐かしく思い出される。三年生でまた、東京の生地近辺に戻り、馬込第一小学校に



入った。

やがて、東京空襲が始まり、四年生のとき、学校は馬込に駐屯する軍隊の宿舎になり、無期限に閉鎖された。その少し前、地方に集団疎開する生徒たちを見送っている。田舎に縁故のある者は近いうちに疎開するという条件で残留した。天下晴れて学校に行かなくてよい事態に直面して、ぼくは、手放しにうれしく、解放感に浸った記憶がある。



それからは毎日のように、昼間は、大空にB 29の編隊を眺め、夜は空襲による火災で真っ赤に染まる空を眺めて過ごした。どちらも美しい風景だった。日本軍も地上から高射砲をドーン、ドーンと打ち上げていたが、高空を飛ぶ飛行機にはと

どかなかった。とくに空襲の激しい時は、京浜国道沿いの崖に掘られた防空壕へ避難したが、わが家の周辺は焼けなかったこともあり、戦中期のそれらの事象について、とくに怖いという印象を抱いた覚えはない。休校の期間は、むしろ、ぼくにとっては、ハレの日々だったといえよう。

昭和十九年の早春、見渡す限り焼け野原の東京を後に、信州の杓掛（現中軽井沢）の親戚の家に疎開した。転入した小学校は軽井沢と杓掛の中間にあった。おそらく軽井沢地区唯一の小学校だったと思う。

同じクラスの中に疎開組が四、五人いた。転入した次の週あたりから、ぼくは殴られた。疎開組は毎日一人ずつ交代に、学校の帰り道、地元の子どもたちから、集団で殴られていたのだった。月曜日は○○、火曜日は××、水曜日は小宮山というように。ぐるっと輪状に取り囲み、いっ

せいにボカボカ殴るのである。そして輪を解くと、さっと散るようにそれぞれの方角に帰っていく。暴行の時間は瞬時といえるほどのもので、その間、終始無言だった。それがほとんど毎日つくのである。異文化との出会いに圧倒されたものの、対象は疎開者全員と民主的だったためか、精神的ダメージはさほど大きくなかった。

反撃の方法を思いめぐらせているうちに、体育の時間に相撲大会が催されることになった。不思議なことに、疎開組はみな強く、地元の子どもを次々と倒した。「東京の子は柔道の技を使うからズルイ」と異議を申し立てる者があった。けれども、先生は黙っていた。それ以降、ぶつり、学校帰りのいじめはなくなった。

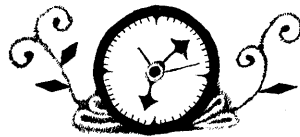
そのうち、子どもたちは親から「いじめてこい」といわれていることが判った。親戚の叔母が、「親がそんな事をいうなんて困ったもんだ」

とつぶやいていた。この言葉を自分がどう受けとめたかは、覚えていない。

こういう大人の階層の、東京人に対する姿勢は、近代日本が変態させた軽井沢の特殊な土地柄によるのだろう。平時、土地の人の多くは、冬の

間の空き別荘やゴルフ場の維持、管理、その他雑多な下仕事など、別荘族の優雅な生活に関わることで、多少の現金収入を得て生活をしのいでいた。自我の均衡を保つために、無意識のうちに、

仕返しを内在化していったのだろう。それが、疎開者を迎えたことで、顕在化したのだった。別荘族とは何の関わりもない、ぼくたち疎開組は、と





んで火に入る夏の虫となった。

疎開して半年足らず、その年の八月十五日戦争は終わった。その節目を象徴したものは、担任の先生が生徒を殴るのを止めたことだ。

間もなくわが家は、信越線で沓掛から三十分ほど下った上田という小都市へ移り住んだ。住居は郊外の街の中心からかなりはずれた、千曲川のほとりにあった。ぼくは上田としては農家の子の多い東小学校に転入した。入学して以来、五つ目の小学校だった。

ぼくは、軽井沢での体験から、新しい学校に恐れを抱いていたと思う。転校という事件は、常に緊張を強いる。自分がこれまで身につけた意識がどれ

ほど通じるか、新世界の共同観念をどれだけ理解し、受け入れることができるか。

入学当日の下校時、同じ地域に帰る四、五人の一人から、自分たちについてくるようにいわれ、いっしょに帰路についた。そこは、集落の寄り集まっているが、背後に田畑が広がっている、踏入という名の、もうほとんど農村と違ってよい地域だった。ぼくは一団の中のMの家に連れていかれ、いっしょにイモを食べたり、雑談したりした。Mは一団のボスだった。どうやら、その会食で、ぼくは四年一組の踏入地区の成員として認知されたようだった。Mは、踏入地区共同体のボスにとどまらず、クラス全体のボスの存在だった。おだやかな人柄で言動も普通なのだが、何かしら威厳があるように見えた。取り巻く子どもたちの、王に対する臣下のような態度が、そういう雰囲気醸成していたのかも知れない。Mはしか



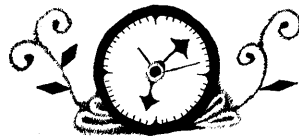
し、よく出来た人物だったと思う。クラスの中でいじめやトラブルが皆無のはずはないと思うが、全く覚えていない。とにかくおだやかなクラスの印象が強い。Mの存在が大紛争の抑止に大きく働いていたのかもしれない。

通過儀礼を経たのちも、地区共同体にとくに縛られることもなく、クラスの中でも、客人として処遇され、卒業するまで心地よく過ごすことができた。

五年生に上がった時、クラス替えがあった。新しいクラスには、Mはいなかった。そこではそれまで全く目立たなかったOがいつの間にかボスになっていた。とはいえその及ぶ範囲は限られていた。女子はもちろん、男子の半数以上も、権力の拉致外にあった。それでも、その及ぶ範囲でのOの威力は絶大だった。配下はボスの一挙一動にそって去就をきめていた。

ところがある日、突然、配下の一人Sが、机のふたで、Oの頭を殴りつけるという事件が起こった。Oの頭は血が滲んでいた。そこに至るまでの経緯はぼくには不明だった。安定型のボスとしての、則を越える振る舞いが、引き金になったかも知れない。この一件で、今度はSが王座につき、卒業まで続いたような気がする。

新制中学として二年目の上田第一中学校へすすんだ。この中学校は僕の出身の東小学校と街中にある南小学校の卒業生からなっている。前述のように、東小学校の区域は農家が多い。次いで職人





の家庭が目につく。これに対し、南小学校は、商家、サラリーマンが大半を占めている。その風土を反映して、東校では封建的ヒエラルヒーを好んでつくる。一方、南校生は、個人主義的色彩が強い。それでいて、東校生に対面したことで、結束を固めたように見えた。互いに異界の人として、かなり長い間、一定の距離を保っていた。

ぼくはといえば、中途半端な心地ですごしていたように思う。もともと疎開者として、東小学校の共同観念はきわめてわずか身についたに過ぎず、一方、南小学校の感性は東京に通じるものがあつたにもかかわらず、南校生の、暗黙のうち東小学校出身者を避ける姿勢に、一步踏み込み関わることが躊躇された。それで、ホー

ムルームで珍奇な発言をしてみせるなど、いま、振り替えると恥ずかしい振る舞いを時折しながら、しばらくの間、境界で傍観者をつとめていた。

一年目の秋、サッカーをやるということになった。しかし、サッカーボールがない。そこで、東小学校の領域の田んぼへみんなで出かけた。イナゴを取り、それを売ってボールを買おうというわけである。イナゴはたくさん取れ、ボールを手に入れることができた。当時としてはサッカーボールは、かなり高価なものだったのである。

それからは、ほとんど毎日、放課後、校庭に出て、陽が沈むまで、ボールを追いかけて蹴とばして遊んだ。この時間、東校、南校の意識は消えていた。強いられた授業に耐えて、硬直した心身は、指図のない、決まりもいいかげんな、手づくりの

サッカーによって解きほぐされた。「もう、帰れ」と先生に怒鳴られて、家路についた。

当時はすでに、野球全盛の時代に入っていて、いつも、校庭の二、三か所で、他のクラスや学年の群れが野球を興じていた。サッカーを選ぶのは、ぼくたちのクラスだけだった。校庭では野球と交錯して、小さなトラブルは絶えなかった。しかし、それを乗り越え、しつこくサッカーをつづけた。学校公認の野球部も誕生していた。体育の怖い先生がその監督をつとめ、管理していた。野球部の練習がある時は、他の群れも含めてだが、校庭から強制的に排除された。ぼくたちは、学校権力と野球部をささえる生徒たちの共同意志を罵倒して、憂さをはらすしかなかった。それ以来、ぼくは野球嫌いで通している。

ぼくたちは、ただ、ぼうっと突っ立っていることの多い野球なんか、スポーツじゃない、みんな

が絶えず動きまわるサッカーこそ、本当のスポーツなのだ、という共通認識に達していた。東校、南校という出身小学校への帰属意識は、この観念の共同化で薄れていったと思う。

このような度重なる転校体験は、ぼくをしてフリーに固執する姿勢を強いる一方、遊びの共同体の魅力を知らしめた。年を経てから、度々、サッカーチームをつくろうと、真剣に考えている。いまだ実ってはいないけれども。ここ二十年来、箱の中という小さな畑で、野菜をつくりつづけているのは、基本的には東小学校の農村文化圏に、身を置いていたことによる。

(家庭菜園研究家)

# ある日の育児日記から

(83)

佐藤 和代



有は五歳。今「文字」にこっていて、毎日何やら書きちらしています。このあいだ保育園でたこを作ってきましたが、有の作品を見てびっくり。大きな字で「0157」と書いてある。他の子のたこはみんな楽しい絵が描いてあるのに…。

このたこを見て思い出しました。学生の頃、ある「文字を教えない」主義の保育園の公開保育を見にいった時です。先生が、子どもたちの色彩豊かな絵を何枚か見せたあと、一枚の絵を出してきました。そこには、文字らしきものがちらばって、申し訳程度に絵がそえてありました。さっ

きの絵と比べると、ずいぶん貧弱な作品です。

「ね、文字を教えると、絵がこうなってしまうんです」と先生。

そのときは、うんうんなるほど、と思った私でしたが、今、有のたこを見たら、少し違うんじゃないかと思いはじめました。有のたこも、あのときの文字まじりの絵も、子どもが今興味のあることをそのまま素直に描いただけ。絵として貧弱だからダメな作品、と決めていいのでしょうか。子どもの絵はのびのびカラフルでなければ、なんて、描いている方にしたら迷惑な押しつけですよ。

といってもまあ、0157はちょっと…。もう少し楽しい文字書いてよ、有!



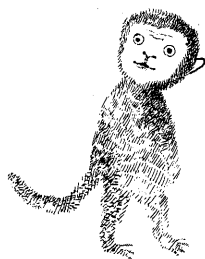
# 夢の田々

## 二人で入園し、 三人で卒園(二)

大 多 和 檀

前回は思わず、地元の紹介になってしまいました。せいちゃん、ふみちゃん、そして私の夢も叶えていけた生活の大事な環境として、幼稚園そのものがどうだったか、ということがあります。

少人数ということもさることながら、歩いて二十分程度の所に、人数的にもあまり差のない区立幼稚園が二つあり、園長、主任が、基本的には「形式ばらずにお互い自然な形で交流し、少人数のデメリットを少しでも解消しましょう」という姿勢をとってくれたこと





が、とても大きかったと思います。

そのお陰で、中でもS園とは、卒園まで兄弟園のように何かと行き来し

——この道中でも“地元発見”の楽しみがありました。大きなパン屋さんを見つけ、ガラス窓にへばりついて天火から出てくるパンを見たり、ふみちゃんの好きなインコを飼っている家を見つげたり、路地に入ったら、先生だけ太すぎて抜けられなくなったりと……、園外保育も日

▼S園の同年齢のお友達

S園のT君はクラスでは男の子一人でしたので、せいちゃんとお友達になりました。



▼S園と一緒に砧公園へ

落葉のフトンは気持ちがいい！

ふみちゃんとSちゃんが落葉を集めています。

程を合わせて出かけていき、お互いせいちゃん、ふみちゃん以外の同年齢の友達も見つけました。

又、図書館も十分程度の所にあるので、ここでS園と待ち合わせしたところ、図書館です。本を借りたあとで、普段二人では非常に疲れてしまいうりれー、鬼ごっこを楽しんだものです。

こういった事自体が、今の私の園





から見ると夢のような生活です。

この図書館利用というのは私にとっては神明幼稚園に来て初めて体験したことでしたが、びっくりしたのは、子どもたちが、たくさんある本の中からちゃんと自分に合った本を見つけてくることです。

ふみちゃんは鳥が好きで、どうしてか鳥の出ている本を見つけてきます。せいちゃんはその図鑑とか細かい絵のある本です。

これもなんと幸せな事だったかと思えます。たくさん絵本に囲まれ、自分のペースでゆっくりと選んでくる時間があるという……。今私のです横浜の瀬谷区ではそうはいきません。図書館は遠いし、道路状況が悪くてとても歩いて行けません。それで、園内に図書室っぽい場所を作ろうと今、予算のやりくりをしているところです。

さて、もう一つ、神明幼稚園は小学校との併設園だったということがあります。小学校も少人数ですから、行き来が本当に自由でした。

休み時間になると砂場に遊びに来たり、二人のお店やさんごっこのお客さんになってくれたり、スキーごっこに加わったり、虫の名前を覚えてくれたり——私がカマドウマという虫を知ったのも小学生からです——、運動会の練習を応援したり、プールを使ったり、大カルタ大会を一緒に楽しんだりと……。

何事も無理なく一緒に行い、小学生がお世話をしてくれました。

▼七月はふみちゃんの誕生日の日

せいちゃんはふみちゃんに内緒で、ドレスを作ってプレゼントしました。

学校にはよく業者の人が入って作業をすることがあります。ある日、プールのフタあけ作業があり、これを目にした二人は、三人のおじさんが汗をかいて慎重にフタを重ねている姿をじっと見ていました。せいじ君が思わず「すごいね、力持ちだね!!」と言うと、おじさんが「この板に比べたらみんななんか軽い軽い」と言って、ふみちゃんの肩の上をつかんで持ちあげてくれ、「ワァー!!」とどびびっくりしたこともありま



した。

そして、何より他学年のクラスと自由に行き来できたことです。外遊びはもちろんのこと、部屋の中でも、トイレをはさんで両方に部屋があるため、何気なく雰囲気を感じとったり、遊びに加わったりできました。

この当時の二人は、せいちゃんは何にでも興味を示し、「楽しいね」「ふみちゃんもやろう」と、ふみちゃんに声をかけ、一方、ふみちゃんは一人で書いたり作ったりする事が好きで、遊びには自分から「入れて」と言えず、せいちゃんから声をかけられるとホッとうれしそうな顔をする、という状態でした。

ですから二人でいるとあまり波風が立たない状態でしたが、年長さんが加わる事によって、「変なの、この絵」とか「泣いたって入れてやらない」と言われる事もあって、「困った、どうしよう」「そんな事言われると悲しい」という事を感じとるとても大切な体験だったのです。

(まこと幼稚園)

# 年長組の一学期を

## 終えて思ったこと

高橋 陽子



当園にて初めて年長組の担任になり、しかももちあがりながら年中組の七月から翌三月まで産休・育休をとっていた私にとって、この一学期はつかみどころのない“大変な”毎日であった。

昨年を思い出してみると、年中からの人とは入園のあわただしい時期を三か月すごしただけ。年少からの人にとってもそれまでのようには目をかけ手をかけはできずにいたので、放り出されたような三か

月だったと思う。そして担任が代わり新しい先生のもとで丸九か月をすごして年長になり、名前だけは覚えていた程度の私が戻ってきたわけで、子どもたちの方が“大変な”思いをしていたかもしれない。

進級式から二、三日は緊張していた子どもたちも、幼稚園自体は変わっていないことに安心したのか、私を試しているかのように奔放に遊び始めた。

色々なことにおわれてあたふたしてらうちに、い

くつかのグループができていて、あまり交わることなく一日を過ごしていることに気がついた。特に、四歳からの女兒七名中五人からなるグループは、完全に孤立しているようだった。登園すると五人がくっついて、たいてい外に出て行く。「行ってきます」のこともなく、帰るまで戻ることもしなかった。よく遊んでいるのだろう、と氣にとめることなほかの様々な要求に応えたり、ちょっと目立つ動きのある子どもやグループに話しかけたりして一日を過ごしていた。九か月の空白は私に、早く信頼関係を作りたい、子どもに添わなければいけない、という焦り・不安を抱かせ、結果的におっかなびくりの対応になり、ぎくしゃくした関係を深まらせるだけだった。

その五人の女兒たちに「うん」と感じたきっかけは、進級式より二週間近くたってからのこと。年長さんから年中・年少さんへ、ペンダントのプレゼントをしようということになっていたが、ひもにつけ

る絵をかくのは自分たちの遊びに夢中の子どもたちには後回し、となる。「明日はかこうね」といっても、次の日になれば「えー」「やだー」となる。そんなわけで、一週間すぎ二週間となってしまった。

その日の朝、登園してきたA子に「A子ちゃん、ペンダントの絵を今日はいいてね」というと、部屋にまだいた母に隠れ泣き出したのだ。空白のあった担任は、泣かせてしまった、という罪悪感から、なだめるように色々声をかけたが泣きじゃくるばかり。

「玄関のイスのところで落ち着くまでいてください」と、三人で玄関の方へ行くと……。他の四人が、びったりついて来る。私が一番そばにいてあげるのよ」とお互い牽制しながら、群れて来る。イスのところに机があるのだが、紙やサインペンを運んで、そこで遊んでいる。A子は、年中の二学期に、かなり長い期間母と離れられずに部屋、もしくは玄関で過ごしていたことは聞いていたが、年長になってからは母と一応別れられていたし、友だちと

交じって遊んでいたので、幼稚園が生活の場として、A子の一部になつてゐるのだからと思つていた私は、泣かせてしまったこと、元に戻つてしまふのではないかという不安、そして四人の子どもたちにも「先生、いらぬわよ」と言われているようで、かなり落ち込んでしまった。そういう事実があつて何日間かは余計にはれものにさわるように関わつてしまつたのであるが、その五人を見てみると、A子を四人がとりまいてゐる、そういう一団なんだと気がついた。お互いに惹かれあい、一緒にゐると落ち着けるといふのではなく、ひたすらA子と一緒にいたいと四人が別々に思つてかたまつてゐるのだった。そのことに気づいてから少しずつ気にして見てゐるとA子は朝、母と一緒にゐるが、四人のうち誰からでも声をかけられると、母と別れて遊び出せるようだった。

E子はA子とはいたいが、他の遊びにひかれることもあつて、朝のうちから「帰り一緒に座つてね」

と言つてゐるらしい。A子は誰にでも「いいよ」と言つてゐるようで帰りぎわにトラブルがおこる。その日も、結局座らせてもらえず、泣きじゃくつてゐる。泣きながら今まで心の中にたまつていたことを、一気に話し出す。内容は、いつも朝約束するのに帰りは座れない。B子ちゃんにダメつて言われるから、というものだった。B子の強さはすでに感じていたが、日が経つにつれますますエスカレートしていく。外ままごとを部屋から離れたジャングルジムの方にもつて行き、自分はおかあさん、A子は赤ちゃん、他の子は仲間に入れぬ、もしくは隣のおばさん、もしくは猫などの動物と、勝手に決める。だからままごととは使つちやいけない、となる。ブランコに乗るにしても、A子ちゃんは、怖いと泣く、他の子は強くこいじゃうから、自分となら乗れる、と決めて他の子とは二人乗りをさせない。

C子は、B子に何を言われても、A子といたために、我慢し続けたらしい。外ままごとの所に一緒

にいるのに、何もしていかないようなので声をかける  
と、C子が答える前にB子が「だってねえ」と口を  
とがらせて理由を言っている。C子の言いたいだろ  
うことを代弁して、一緒に遊べるようにしたり、  
「ここで一緒にやれても、上べだけだろうな」と思  
う時にはC子の手をひいて雑談しながら他のところ  
へ行ってみたりした。そんなことを繰り返している  
うちに、C子が嫌なときは自分から担任に言いに来  
てくれるようになった。それまでに二か月経ってい  
た。

さてもう一人D子は、A子といたい願望  
はB子以上に強いが、B子に何か言うわけ  
でもなく言われても自分は自分の思いで一  
緒にすることが多いように思えた。加えて  
園で飼育しているチャボを抱きたがり、こ  
ちらが何もいわなければ一日中抱き続ける  
ほど没頭していた。チャボを抱いたD子  
と、A子、B子、C子の四人でいることを

よく目にするが、A子、C子、D子は何となく過ご  
しているようにも見え気になっていた。

ある日C子が「先生、お遊戯室に来て」と言っ  
て来る。行ってみると大型積み木で囲いができてい  
て、A子、B子、D子がいる。C子が「B子ちゃん  
が一番汚い人魚しかダメって言われた」と言って来  
る。B子は聞く前に「だって一番汚い人魚しか余っ  
てないもん」と言う。担任はB子に「一番汚いっ  
ていわれたら、イヤな気持ちになるでしょう」と伝  
え、C子には人魚の出でくる話―人魚姫―の本を見



に行こう、と言ってその場を離れるようにした。人魚姫の本をとってあらずじを話したり、挿絵を見ながらこの人魚がかわいいねなどと話してからお遊戯室にもって行く。B子もその本に興味をもったらしく眺めるが、C子がかわいいと思ったのと同じ絵をさして「私これね」と言う。C子も「私これがかわいい」と言うと、「ダメ、私だけ」とB子のことばが強くなりだったので「そんなこと言っていないで人魚になっちゃいましょう」とB子、C子と片方ずつ手をつなぎ部屋に戻る。A子、D子もおいかけて来て、さらに部屋にいたE子も「何事だ？」と興味を示し、人魚のしっぽ作りの用意を始めた担任のそばに来るが、B子はお遊戯室に戻ってしまう。しばらくしてB子に戻って来て他の子どもたちが大きなしっぽをぬり始めるのを見て、自分もすると言う。C子が「先生、水色ダメって、同じ色ダメって言われた」と言いに来た。(まだそんなことなのか)と思いつつ「いろいろな色にしてもきれいよ」と言う

た。C子は水色とピンクにぬりわけ、B子に「へんなの」と言われもしていたが、しっぽをつけたりしているうちに気は紛れたようだった。その日は降園時間になってしまい、全員つけられる状態にして引き出しにしまったが、次の日はじゃがいもほりという行事がはいいり、その次の日は私が休んだこともあり、それ以降引き出しから出てくることはなかった。こちらから人魚に引き込んでいれば、例えば人魚姫の劇につなげるなどをすれば、子どもに違う世界を提示できて、友だち関係や遊び方がかわったかもしれないと今は思うが、その時は他にも関わりたいところがあつたし四人の関係をもっと見たいと思つ





たことがあって、特に働きかけはしなかった。

年長になると園全体の行事に加え、ペンダント作り、よもぎつみ、よもぎ団子やさん、などなど、次々に行事がはいってくる。もちろんその季節にあったものであり是非経験させてみたいものであり、行事に参加する姿を通してその子どもが見えてきたり、子ども同士で新しい発見があったりするのも事実であるが、一日ゆったりと幼稚園の中で遊んでいる姿から得られるものも大きく、大切にしていきたいのである。何日もゆったりと過ごす中から、教師と子どもたちが、子ども同士が、子どもと物とが、出会ったり、お互いを探ったり、離れたりくっついたりしてわかりあっていけるのだと思う。はじめに書いたように年長が初めての私は、行事など特別なことがあるたびに緊張してしまい、何とかこなしているだけでゆとりがもてなかった。終わるとホッと、また次に何がくる?とかまえての連続だった。

もしも、もっとゆったりした毎日を送っていたならこの五人はどうなっていたらうか。教師のゆとりが子どもたちに伝わり、もっと穏やかに生活する中で、彼女たちが人を頼りすぎることなく、自己防衛のために強くでるわけでもなく、思う存分自分らしく過ごすことが早い時期からできたのではないかな、と思う。

一学期末の様子は、というと、A子とB子は一日中一緒にいるが、C子は他の女兒のグループにすることが多くなり、D子は違う友だちとロングスカートやおっかむりをしてふざけあっていたり、E子はちょっとずつ色々な遊びに加わったり、物を作ったり「つまらない」と担任に言っ来てたりしている。

長い夏休みにはいるのが、惜しいような、そんな学期末だった。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

# あそびはらっぱものがたり

— あ き —

すとうあさえ

どんぐりころころ

カシャ、カシャ枯れ葉を踏む音、どんぐりでふくらんだポケット、公園のすみで見つけた小さな小さなきのこ。秋は秋の楽しみが、子どもたちを待っていてくれます。では、あそびはらっぱものがたりのはじまり、はじまり。

秋といえはどんぐり。スタッフの一人千春さんが、いろんな形のどんぐりを帽子付きで拾ってきてくれた。さっそく、子どもたちに「ぐぬぎ」を見せると、「ぞうさんどんぐり」「ハリちゃん」などと声

がとぶ。「マテバシイ」を出すと「でかでかどんぐり」「ミサイルどんぐり」「ベットポトル」。「ミズナラ」を出すと「おかあさんどんぐり」「アルマジロ」。まるで市場の競りのような活気で、どんぐりの命名ごっこが始まった。

「どんぐりにもいろんな形があるんだね」という千春さんの言葉に、その場はおさまって、いよいよ今日のメインイベント「どんぐり染め」にうつる。



園庭に、簡単なかまどを作って火を起こし、大鍋にお湯もわかして、準備OK。子どもたちは、両手にいっぱいどんぐりを持ってきて、「どうするの?」「お鍋の中に入れてごらん」と言うと、一様にずるっと後退りして、どんぐりを威勢よく、鍋に向かって投げ入れ始めた。体は斜め、さらに目を半分閉じている状態で投げているから、ほとんどのどんぐりは、土の上にくるころころ。豆まきじゃないんだからと思うものの、子どもたちにしてみれば、かなりの大鍋。底からは、火がへびの舌のよう

に出している。

「こわい」と言うのもわかるような気がする。とにかく、ころがったどんぐりも拾い集めて、鍋に入れ、ぐ

つぐつぐつ。染め汁ができるまで、子どもたちは、園庭で自由に遊んでいる。火の番をしている私の

は、園庭で自由に遊んでいる。火の番をしている私の

くめざ	ミナチ	コナラ	スタシ	アカガシ	マテバシイ
					
どうさんどんぐり ハリちゃん ハリちゃん ハリちゃん	おかあさんどんぐり アルマジロ	のっほん ほそなかくん	たわんた トラモロロくん	ちびっこ コマさん シベウマどんぐり	でかでかどんぐり ベットポトル ミサイルどんぐり

場所からは、園庭全体をよく見渡すことができる。

砂場で遊ぶ子、泥団子を作る子、私の横で火に、枝や葉を入れている子。ティビ（竹三本を柱にし、その回りに子どもたちが絵の具で模様を描いた大きな布をぐるりと巻いた家。インディアンの住居を真似て、九月のあそびはらっぱで作りました）でおままごとをしている子。いつものように、それぞれの落ち着き場所で遊んでいる。その中で一人、もくもくと熊手で枯れ葉を集めているT子がいる。集めた枯れ葉はすでに小さな山になっている。くすんだ赤黄色、茶色の葉が、はらはらと落ちる下で、女の子が一人ミニ熊手で腰をかかめ、ひたすら枯れ葉を集めている姿は、まるで絵本の一ページのよう。

一方、鍋の中のどんぐりはぐつぐつ煮えて、汁もココア色になり、だいぶどろっとしてきた。木の枝で、かきまわしてみると、水面に白い小さな固まりが浮いてきた。一緒に、火の番をしていた女の子は

それこそ苦虫をつぶしたような顔をして「うわあ、虫だ」。後で千春さんから「ぞう虫の子ども」だと教えてもらう。どんぐりの中で平和に過ごしていたのだろうに、小さい虫は、無残にも釜ゆでにされ、ぶかぶかぶか。

今回染めた布は、ガーゼ。水洗いしたガーゼを、どんぐり色の大鍋に子どもたちが入れていく。それを、順番に枝の先でゆっくりゆっくりかきまぜる。しばらく煮て火からおろし、そのままガーゼをつけた状態で冷めるまで置いておくことにした。

時々、染まり具合をチェックするかのようになり、大鍋から枝の先でガーゼを引っ張りあげに子どもたちが寄ってくる。

さて、先ほどのT子の枯れ葉集め。いつのまにか五、六人の仲間が加わって、だいぶ大きな山になっている。それを、急に一人が崩し始めた。すると、T子も他のみんなも加わって、あっといふ間に山は

まっ平ら。「あらあら」と思っ見て見ると、枯れ葉の上に大きな布を敷いて、その上に全員ごろんと横になった。そして、もう一枚、大きな布を掛け布団にしたら、あっというまに立派な枯れ葉布団の出来上がり。女の子たちは、空を見上げながら、小さくキョッキヤいいあっている。足が、モゾモゾ動いている。気持ちよさそう！

きっかけは、なんだったのか今も不明だが、枯れ葉布団の女の子たちが七ひきのこやぎの劇をやりたいたと言いだめた。千春さんがおかあさん。なぜか私がおおかみという役まで指定され、突然七匹のこやぎの野外劇が始まった。ジャングルジムの客席にはすずなりのお客様。子やぎの家はもちろん枯れ葉布団。

枯れ葉集めが劇遊びに展開していくというように子どもたちの遊びの流れには、脈絡があるようなないような、不思議な意外性があって面白いといつも

思う。

ガーゼは、無事ミルクチョコレート色に染まっはじめての染めは大成功。野外劇も、おおかみが井戸の底に落とされてかわいそうな最後を迎え、幕。

### ぶにゅぶにゅスライム

お天気のいい十一月の午後、屋上はらっばで「スライム」を作った。

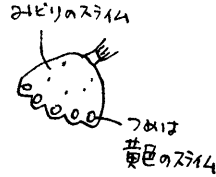
バケツに、材料を入れて、手でくちゅくちゅよく混ぜる。すると、スライムになる瞬間を手の平で感じた子どもたちから「わあっ」という歓声があがった。ひんやりと冷たく、なんと表現したらよいのか、あのぶによぶにゅ感。

始めから終わりまで、ずーっと、バケツの中に手を入れて、スライムをクツクツチュクツチュしていたY子。スライムの端をもって、びよーんと伸ばして「あしーっ」と叫んでいる子。存在が消えてしまっ

たかのように、スライムで飛行機づくり熱中しているK男。見学にきていた女性が、K男の飛行機を見て「すごいね、すごいね」と誉めると、彼は一言「そんなにすごいねって言わなくてもいいんだよ」。



スライムよーんと  
あー？



みどりのスライム  
つめは  
黄色のスライム  
おおいにうけた！  
〈オこの手〉

今回、食紅を赤、黄、緑と三色用意した。三色のスライムと透明のスライムを適当に混ぜてきれいな色合いのスライムを作っている子もいる。Y男は、緑のスライムで片手を丸ごとくるみ、ツメだけ、先生から分けてもらった黄色のスライムできちっとつけてある。けっこう不気味な仕上がりになっている。彼曰く「オニの手」。でも、すぐポロリとはが

れてしまうので、だんだん機嫌が悪くなり、癩癩を起こし始め、「ヒイヒイ」言いはじめ……とうとう顔まで立派なオニになってしまった。

ストローの先にスライムを丸くつけて、息を吹くと丸く膨らむ。それぞれトライしてみるが、けっこう強く息を吹かないとむずかしいので、なかなかできな。Y男は、自分のオニの手にストローの先をつっこんでしきりにふうふう吹いている。

その様子がなんか異様で、とても愉快。子どもって、なんて面白いんだろう！

変幻自在にその姿を変えるスライムと、変幻自在に遊ぶ子どもたち。この相性は抜群だと思う。「あそびはらっぱ定番・スライム」ぜひ試してみてください。

#### ◆材料（一人分）

ほう砂ま（薬局でサインして購入） 小さじ1/2

水

100CC

食紅

ひとつまみ

せんたくのり

1/2本

◆作り方

- ① 適当な器にほう砂の固まりがないように、サラサラ状にする。
- ② 食紅を入れて混ぜる。
- ③ 水でよく溶く。
- ④ せんたくのりを入れて、手でくちやくちやくする。

◆注意

- ・ せんたくのりが服などにつかないように。
- ・ 口には絶対にいれない。
- ・ プヨプヨ状態でビニール袋に入れて二〜三週間はもつ。
- ・ 放っておくと自然に固まる。柔らかいうちに平たくして固めれば、モビールの材料にもなる。

白玉どんぐり団子

またまたどんぐり。シイの実を手春さんと手分けして集めてくる。本当は子どもたちと拾いにいきたいところだが、残念ながらこの近くにシイの木がない。二人で拾ってきたマテバシイを約一五〇個使う。実を洗う。ペチで割る。皮とうす皮をとる。すりこぎで実をつぶ



す。そしてもちろん食べる——この作業は子どもたち。私たちは実をポイルし、蒸したりという作業を引き受けた。

スムーズにどんぐり団子作りは進んで、実をつぶす段になった。すりこぎとボールをセットにして渡したのが大間違い。カンカンカンカンカンカンと一斉にすりこぎでボールをたたき始めたのだ。その音にくらくらしながらも、シイの実を各ボールに入れていく。すると、カンカンでテンションをすっかり上げた子どもたち、つぶすのに力が入って、トンとんとい感じ。上手につぶし始めた。やれやれ。次はそのすりつぶした実に、白玉粉1/2カップに水を混ぜて耳たぶ状にしたものを混ぜる……ハズだった。全体量をみたら、だいぶ少ないことに気がついた私たち。シイの実はない。あるのは白玉粉。それなら、ある方をいれるしかない。というわけで、白玉粉をあるだけいれて量をふやし、団子にす

ることに決定。最後は蒸して三十分。きなこ砂糖をまぶして出来上がり。白玉団子の中にシイの実がほどよく混ざって子どもたちの感想も「おいしかった！」

### いい場所

気持ちのいい場所を見つけた。そこは、井の頭線の駒場東大前の駅から見える場所で、夏は木と草がうっそうとして中に入ることほできない。でも、ほどよい傾斜があつて、草木が枯れたら絶対に草スキーができると確信。「秋になったら子どもたちと行こう」と千春さんと決めていた。

その日があった。

子どもたちは、うっそうとした茂みを通りぬける時「やだーっ」を連発していたが、目的地について、ぱあーっと視界が広がったとたん、イキイキ。そこは、思った以上に魅力的な場所だった。木々



のにおいでいっばい。なだらかな傾斜は一面枯れ葉のじゅうたん。枯れ木がぬうっと横たわり、ツタが枝からぶらさがっていて、木の枝が地面に向かってアーチ状に垂れている。

ごみ袋をお尻に敷いて、夢にまで見た草スキーを始める。しかし、残念ながら、すべらない……。子どもたちもすべらないのだから、体重のせいではない。やはり、段ボールじゃないとだめだったかなと反省。

でも、がっかりしているのは私たちだけで、子どもたちはそれぞれに遊んでいる。ゴミ袋の中に入ってじっとただすわっている子。斜面を、ゴミ袋のマントをつけて走り下りている子。何度も何度も地面から顔をだしている根を必死になって引っ張っている子。長いつたを枝にかけて、ブランコにして、ゆうらゆうらしている子。圧巻だったのは、地面から一メートル位の高さの所、ひゆるんと横にのびた枝の

上を一人で渡って下りた子。おそるおそるへっぴり腰になりながら、しっかりと枝をつかんでそろそろと渡りきったT君。「やったよ、やった」と大喜び。こんないい場所が、たくさんあったらいいのにと心から思う。

\*

からすうりの朱の色とぶくらした膨らみは本当にきれい。もうしばらく見ていたかったのに、女の子が「お人形を作る」と言ってぱっさりカットしてしまった。すると、中から種が出てきた。女の子は開口一番「あっ、黄色い納豆」。夕焼け色に黄色のコントラストが、またきれい。

秋の日は短く、ますます短くなって、あそびはらっぱも秋から冬へ……。

(幼年童話作家)

# 編集後記

本田先生の『児童の世紀』を振り返る」の連載は、その四一になりました。保育も研究もそして私自身の子育ても、その時代の空気のなかにあったのだと感じさせられます。

\*

高橋先生の記事を読んでいると、「年長組」の先生の大変さが伝わってきます。私には、長男のLが一年保育の公立幼稚園に通っていた頃のことか思い出されました。

ある朝のこと、登園したLにN先生が誘います。「Lくんもコリントゲームを作ろうよ」。ぼかぼかと冬の日の当たる園庭にはすでにゴザが敷かれ、数人が板切れにクギを打ち

付けています。あたりに響くトントンという小気味よい音、幼い子どもたちの大工仕事をする姿。私は思わず「おもしろそう」とつぶやきました。ところが、Lは予定した別の遊びがあるらしくその誘いにはのりません。それから毎朝のようにその誘いは続きました。結局、Lができあがった作品を持ち帰ったのは何週間も後のことでした。けれども、一旦作ってみたらおもしろかったのか、早速その日から、友人や妹も交えた家でのコリントゲーム作りが始まり、にぎやかに遊んでいました。

コリントゲームのおもしろさを全員に経験させたい、それも一人ひとりのペースに合わせて、という意図を実現させたN先生の根気強さに脱帽させられました。

(A)

## 幼児の教育

第九十六巻 第十一号

(一九九七年十一月号)

定価四六〇円(本体四三八円)

発行 平成九年十一月一日

編集兼発行人 田代和美

発行所 日本幼稚園協会

〒112東京都文京区大塚二一〇一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所 図書印刷株式会社

〒108東京都港区三田五二二一

発売所 フレーベル館

〒113東京都文京区本駒込

六一四一九

☎〇三―五三九五―六六一三(営業)

☎〇三―五三九五―六六〇四(編集)

振替 〇〇―一九〇二―一九六四〇

☆ 本誌ご購入のご注文は発売所フレーベル館にお願いいたします。

☆ 万一、乱丁・落丁などがございましたら、おとりかえいたします。

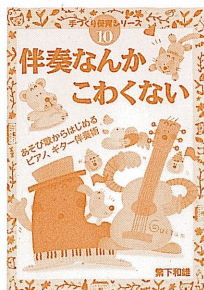
## 手づくり保育シリーズ

10

# 伴奏なんかこわくない

あそび歌からはじめるピアノ、ギター伴奏術

◆繁下和雄 著



楽器の扱いが苦手の保育者向け。ピアノ、ギターなどこれ一冊をマスターすれば、いろいろな曲が簡単に弾け、ほとんどのあそび歌の伴奏ができるようになる。



B5判 96頁 定価 本体2,200円+税

## 手づくり保育シリーズ

11

# おはなしマジック

—妖精から贈られた魔法の粉—

◆あんざき こういち 著



だれでもできるやさしい手品を紹介。お誕生会やいろいろな行事の集会などに効果のあるマジック特集。

しかもマジックがおはなし形式で構成され、子どもはもちろん大人にも十分楽しめる。

### ●内容

三匹のこぶた	ゴンドラごん	だらんだらん
三日月のペンダント	ヒツジとオオカミ	にんじんきらい?
ぴっぴっぴ	ジャックと豆の木	星に願いを
王子ミグルーシャ		

B5判 96頁 定価 本体2,200円+税

キンダーブックの  
**フレーベル館**

## フレーベル館創業90周年記念出版

付：外国の保育・教育 40か国

### 現代 保育用語辞典

基本的な保育用語約2,000語を精選、50音順に配列し、解説。

弊社創業90年・「キンダーブック」創刊70年を記念し、21世紀を視野に入れた情報源・知識源『現代保育用語辞典』を企画いたしました。新しい時代に対応する常備書として、皆様のお手もとにご用意いただければ幸いです。

保育を語る時に欠かすことのできない基本的な用語、新しい保育観・子ども観から出てくる言葉などを通して、これからの保育のあるべき姿を分かりやすく示す辞典。

みだし語は英語訳付きで、今の保育に直結する語釈をポイントとし、引きやすく、意味がすぐ確認できる辞典。

#### 編集委員

岡田正章・千羽喜代子・網野武博・上田礼子・大戸美也子  
大場幸夫・小林美実・中村悦子・萩原元昭

#### 執筆者

保育及び隣接分野の最高権威者330名が参画。

A5判・592頁・定価 本体7,767円＋税

### 現代 保育用語辞典

フレーベル館

## 保育の基本〈全6巻〉

21世紀の保育を見つめて、今、保育の基本を問直す。

幼稚園教育要領や保育所保育指針の中で示されている「保育の基本」は、さまざまな形に受容され実践に移された。しかし、そこに誤解に基づく混乱はなかったか。本シリーズは、具体的な事例を通してその混乱をただし、あるべき保育の姿を提案します。



- ◆第1巻 環境を通しての保育とは
- ◆第2巻 生活と遊びを通しての保育とは
- ◆第3巻 個と集団を生かす保育とは
- ◆第4巻 自由の中で規律が育つ保育とは
- ◆第5巻 発達に合わせて援助する保育とは
- ◆第6巻 総合的指導による保育とは

#### 編集委員

森上史朗（青山学院大学教授）  
高杉自子（子どもと保育総合研究所）  
今井和子（東京成徳短期大学助教授）  
後藤節美（別府市・石垣幼稚園長）  
田中泰行（東京都・向南幼稚園長）  
渡辺英則（横浜市・港北幼稚園副園長）

- 今特に問題となっていることを各巻のテーマに
- 子どもに寄り添う保育を●これからの保育への提案

A5判・各216頁・セット定価 本体12,000円＋税

キンダーブックの  
**フレーベル館**